

## 原田産業株式会社

原田産業株式会社は大豆の選別機、脱皮機など食品機械の開発を目的に創業し、現在は食品プラントや穀物選別プラントなど、食品メーカーの幅広いニーズに応じて製品を受注設計・製作している。また、食品産業で培った経験を活かしてリサイクル選別プラントなど環境分野にも進出、存在感を発揮している。取引先と二人三脚でのモノづくりにこだわる選別プラント専門メーカーとして発展を続けている。

### 業界の“ヒット商品”となった大豆選別機

原田産業株式会社は、原田直輝社長の祖父、原田敏一氏が1957年に都内でペリカン商事として創業（その後、1966年に原田産業株式会社に改組）した。敏一氏は兵庫県姫路市の出身で、実家は280年続く仏具屋を営んでいたが、単身上京し、大豆などの穀物を加工する機械を作ろうと同社を立ち上げた。

創業時は、大豆を煮る機械の販売からスタートし、その後、大豆の脱皮機の販売を始めた。販売は順調に進んでいたが、ある日、米国産大豆を輸入していた大手商社から、大豆を陸揚げする港で使う大豆選別機を作ってくれないかという要望を受けた。初代は、大豆を転がして選別する「ロール選別機」という独自の機械を開発した。



初代社長 敏一氏と二代目社長 敏康氏（1990年頃）



大豆のロール選別機

ロール選別機は、ローラーが回ってその上を大豆が流れる仕組みのもので、大豆の形状に応じて選別する機械だ。機械の上を大豆が流れる速さや機械の角度や捻り、大豆の供給位置など、様々な工夫がこらされていて、発売直後から業界のヒット商品に成長した。

それまでも豆を選別するニーズはあったものの、従来の選別方法はふるいで大豆を選別する古典的なやり方で、本格的な機械の登場に市場に衝撃が走った。同社のロール選別機は、現在までに国内の大豆選別機市場の9割以上のシェアを持つほか、アジアや北米、南米など世界中で販売されるに至り、北米だけでも40カ所以上で同社の製品が使われている。国内ではロール選別機は主に港の選別工場で使われてきた。海外から大豆が船便で輸入され、港の穀物サイロで選別されるが、

同社は選別能力が毎時 25 トンの処理が可能な大型機械を日本で初めて手掛けた実績を持つ。大型機で選別の精度が高いのは、他社には存在しなかったという。

大豆選別機のほかに、初代の指揮で開発・発売した「大豆脱皮機」も同社の看板商品だが、このほかにも二代目敏康氏（現会長）が考案した納豆のプラントもヒット商品となっている。1970年代初頭、納豆メーカーがまだ家内工業的に商売をしていた時代、工業製品化の先駆けとして、食品企業から依頼されて開発したものだが、現在では、この納豆プラントも市場シェア 4 割を誇る製品に成長している。

### 食品機械に次ぎ環境分野を開拓

1990 年代、原田産業は食品機械で成長する傍ら、第二の成長の柱を探していた。辿り着いたのが海外事業と環境事業であった。1997 年に 2 つの事業を同時にスタートさせたが、環境事業では、廃タイヤからワイヤーを抜いて欲しいという引き合いや、建築廃材の選別需要が増え始めた事から本格的に市場参入を果たした。同社は環境分野向け専用機として 97 年に比重差選別機を開発した。機械に廃材などを投入すると、重いものが下に沈んで、軽いものが浮く構造で、産業廃棄物の中間処理事業者から高い支持を得た。というのも、従来、中間処理事業者はコストをかけて廃棄物を最終処分場に持ち込んでいたが、同社の選別機を使うことで、自社内で選別が可能になりお金を払わずに処分ができるようになったからだ。

環境意識の高まりや法規制強化を追い風に環境業界向けの選別機需要はますます高まっている。特に建築廃材のリサイクルニーズは多く、「パーティクルボードと呼ばれる化粧合板の原料の木材の選別需要が非常に伸びている。リサイクル業界は原料が一品一様でお客様によって違うので、どこの業界が伸びてくるのか吟味している」と原田社長はいう。比重差選別機は 97 年の発売後、これまでに 400 台近く販売するベストセラー機に



比重差選別機 SHB-25 全景（建築廃材選別設備）

成長している。「会長からは三つないしは四つの柱は常に立てておけと口を酸っぱくして言われたが、お陰で今は大豆の選別と加工、環境、メンテナンスの四本柱でやっている」と話す。

### 米国留学中に家業を再認識する

同社が環境事業と並んで力を入れてきたのが海外事業だ。1980 年代初頭、中国への大豆選別機の輸出を皮切りに、前述の通り、アジアや北米、南米など世界中で選別機を販売してきた。このうち、北米地域の販売では原田社長に思い出がある。

原田社長は中学、高校時代に卓球選手として活躍した経験を持つ。関東大会や全国大会にも出場し、大学進学も卓球を念頭に考えていた。ところが祖父から「生計を立てられるほど卓球で才能があるのか」とクギを刺された。将来を気にし始めていた頃だった。たまたま米国に留学していた姉のホストファミリーが原田社長の自宅に遊びに来ていて、「キミも留学したらどうか」と誘いを受けた。原田社長は「じゃあ、行こうか」と軽い気持ちで米国に留学した。場所はシカゴで、現地の高校に入り直して、卒業後はコミュニティカレッジに入学、その後、4 年制大学に進学した。

ところが入学後間もなく状況が大きく動いた。大学から 1 時間ほどの場所で、実家の大豆選別機が売れたのだ。北米販売の第 1 号機だった。機械の立ち上げに叔父が訪米し、通訳として原田社長と一緒に立ち会った。その時、同席した商社マンから、「原田君はお父さんの会社を継ぐのかい」



米国企業で働く原田社長

と尋ねられた。「ちょっとまだ悩んでいます」と答えると、相手は矢継ぎ早に「悩むのはいいけれど、お父さんがどんな仕事をしているのか、しっかり見たほうがいいよ。海外に機械を輸出する商売をしているんだから」とアドバイスされた。「確かにそうだな」と思い、自分なりに父親の仕事について調べ始めると、次第に大豆や選別機に興味を持つようになり、「父親の仕事を再認識できるようになった」という。原田社長の考えが変わろうとする間も、カナダで機械が売れるなど北米で次々に選別機が売れ始めた。好調な様子をまのあたりにして、自らも家業に関わりたいという気持ちが強くなり、遂には大学を辞めて原田産業に入社を決めた。米国在住の地の利を活かして、原田社長はイリノイ州にある老舗の種子メーカーに籍を置いた。その間も北米で機械は売れ続け多忙な日々を過ごしていたが、やがて父親である社長から本社の仕事の多忙を理由に帰国を命じられる。以来、家業で勤め、2013年11月、42歳で社長に就任した。

### 事業規模を追い求めるより 「思った事を実現できる会社」を目指す

社長就任と同時に前社長は会長に就任し、息子に権限を譲った。しかし実態は、社長時代以上に働くようになった。「本当に自分が社長になったのかと悩むほど、会長に厳しく指導され大変だった。恐らく、自分の跡を継がせたのが心配だったんでしょ」と原田社長は当時を振り返る。そんな矢先、事態が急変した。会長が脳出血で倒れた

のだ。一命は取り留めたものの、社業は続けられない状態で、そこからは試行錯誤の連続だった。最近になってようやく、今後の経営を考える余裕が生まれた。原田社長は今後の事業戦略について、「事業規模よりも思った事を実現できる会社にする」という目標を掲げている。「求めるものをお客様と一緒に作れるような会社にしたい。特にフルオーダーのプラントを取引先と一緒に作り上げていくことでは、一品一品、お客様の仕様に合わせて、最終製品まで組み立てることを大切にしていきたい」という。

現在、もう1つ、力を入れているのが2017年に本社に立ち上げたテスト工場だ。取引先と一緒に材料の選別をテストするために設置した工場だ。取引先に原料を持ち込んで貰い、どうすれば選別が成り立つのかプロセスと一緒に作り上げていく仕組みだ。「当社には選別に関してのノウハウも蓄積もある。どういう原料や金属が今、選別を求められているのかという情報も集まってくる。テスト工場をさらに強化して、取引先に満足して貰える設備にしてきたい」と原田社長は話す。

一方、今後のビジネスを模索する中で注目されているのが“火山灰ビジネス”だ。同社は今、九



テスト工場（上・左とも）

州の鹿児島県工業技術センターから大きなリサイクル関連のプロジェクトの誘いを受けている。火山灰を選別する仕事だ。火山灰に含まれるガラス素材と石を分別する仕事だが、目的は火山灰を原料にコンクリートを開発するというものだ。現在、産学で研究が進められているが、取引先からは原田産業の選別機がないと選別ができないと言われている。今後の研究次第では、より大型のプラントが必要になる可能性も考えられ、現地への工場進出も想定している。

### 若い頃の夢とビジネスが重なる

原田社長は若い頃から海外志向が強く、「本当は国連で働きたかった」と話す。家業に入った当時は、自分の目標と一致していなかったことから、カラ回りして仕事に自分を合わせていくような感じがあったという。しかし今、事業を通じて、若かりし頃の目標が重なるようとしている。「発展途上国に、当社の設備を入れて貢献できないか、いつも考えている。食品プラントを20年間ずっと海外で売りたいと思ってきたが、食文化が違うので、なかなか思うようにいかない。一方、環境ビジネスは、海外でも共通点が多い。1つがゴミ処理だ。日本でテスト的に様々な金属の選別を行い、それを海外に輸出することが可能」と原田社長は目を輝かせる。とはいえ課題も多い。後進国では法整備が進んでいないためゴミ選別の意義が十分に理解されていないケースも多く見られ、「海外



原田産業・本社社屋

市場をどのように開拓するのか今後の課題だが、市場があれば是非挑戦してみたい」と話す。

### 夢は卓球で全日本選手権のマスターズ代表になること

多忙な仕事の傍ら、原田社長には今、夢中になっていることがある。“卓球”だ。若かりし頃、夢中になって白球を追い続けていた自分に今を重ね合わせながら、「私の夢は卓球で全日本選手権のマスターズ代表になることなんです」と笑顔で話す。

埼玉県には40代のマスターズ大会があるが、昨年はベスト8に入った。県代表に選ばれるにはベスト4入りが必要で、原田社長は仕事が終わると、週2~3回程度、卓球の練習に励む。仕事が終わってからの練習はキツイが決して苦にならないという。一方、本業では自社の製品を販売するために世界中を飛び回りたいというのが目下の目標で、「先代、先々代から継いだ会社を永続させていきたい」と原田社長の夢はますます広がっていく。

#### 企業概要

#### 原田産業株式会社

<https://www.haradasangyo.co.jp/>

代表取締役社長：原田 直輝

創業：1957年

事業内容：穀物選別プラントの受注設計製作ほか

本社：上尾市藤波2-198

電話番号：048-786-5555

取引店：桶川支店

